第２０５回　番組審議会

１．日　時　　平成２３年９月１３日（火）１２：００～

２．場　所　　ホテルメトロポリタン盛岡　ニューウィング　３階「星雲」

３．委　員　　委員総数　　１２名
　　出席委員数　　９名（欠席委員数　３名）

○ 出席委員（敬称略）

中村　慶久（委員長）
三浦　宏（副委員長）
―以下５０音順―
久慈　浩介
斎藤　雅博
東海林　千秋
藤原　保雄
村上　幸子
八木橋　伸之
吉田　浩次

○ 会社側出席者（７名）

佐藤　滋樹（代表取締役社長）
小原　忍　（専務取締役）
藤澤　利憲（常務取締役）
前田　秀男（取締役編成技術局長）
藤原　銀司（取締役営業局長）
君沢　温　（報道部 部長）
井上　智晶（報道部員）

○ 事務局　　村田　重昭

４．議　題

「ＦＮＳドキュメンタリー大賞　浜からの証言」

５．議　事　概　要

今回は８月２０日に放送された「FNS ドキュメンタリー大賞　浜からの証言～2011.3.11　東日本大震災～」を審議しました。出席した委員からは「迫力のある津波の映像に驚いた」、「自ら津波を経験したディレクターならではの目線で良かった」、「津波の教訓を後世に伝える貴重な番組だ」など番組を評価する意見がありました。また一方で「方言が理解しづらいところがあったのでテロップがあれば良かった」、「最後の鎮魂の歌はもっと聴きたかった。歌の内容も紹介してほしかった」などの意見がありました。

６．議事

○事務局

それでは、ただいまより第２０５回番組審議会を開催致します。本日ご欠席の委員は、斎藤純委員、菅原委員、役重委員の３名です。

今回の議題は８月２０日に放送されました「FNS ドキュメンタリー大賞　浜からの証言　～2011.3.11　東日本大震災～」です。本日は、報道部長の君沢とディレクターを務めました、報道部の井上が出席しております。

それでは、中村委員長よろしくお願いいたします。

○中村委員長

それでは議事に入ります。君沢さんと井上さんから、今回の番組の背景などについて、説明や感想をお願い致します。

○君沢部長

報道部としては、震災以来、番組審議委員の皆様に審議いただく震災関係番組はこれで２本目という事になります。震災後１ヶ月目の番組をご審議いただいております。その後、３ヶ月目、そして、おとといの半年の節目に震災関係の報道特別番組を放送しました。その間の８月にこのドキュメンタリーを放送しています。

当初は岩手の医療関係の崩壊をテーマにドキュメンタリーを制作するつもりで取材に入っていましたが、その最中に東日本大震災が発生しました。それを受けまして、これは今しか伝えられないと考え、フジテレビに相談してテー

マを変えました。締め切りが５月だったのですが、それも延ばしてもらう交渉をしまして、東日本大震災にテーマを変え、締め切りも延ばしてもらって取材をする形になりました。

ドキュメンタリーを作るに当たっては、いろいろな手法があると思いますが、今回に関しては、津波は必ず繰り返す、どんなインターバルになるかは分かりませんが、また同じような津波は必ず来る。そのためにテレビとして出来ることを考えました。映像をアーカイブとして残すために、被災した方の記憶が鮮明なうちに何があったかという事を、証言を集めて記録しておかなくてはいけないと考え、多くの人に話しを聞く形態を取りました。千年に一度の津波を報道する者として、津波を目撃した人間に取材してもらうのが一番という事で、宮古で実際の津波の映像を撮影した井上に取材を頼みました。井上には、津波の被害を少しでも防げるような何か手立てはないのかという事を主眼に、いろいろな取材をしてもらいました。

また、同時に自分自身もそうですが、非常に大きな喪失感を感じておりましたので、それを埋めるために岩手の沿岸の人たちがどのような行動をしているのかそれも取材してほしい。そういう意図を伝えて取材してもらいました。

番組の詳しい中味については井上の方から報告がありますので、そちらに譲りたいと思います。きょうはよろしくご審議お願いいたします。

○井上ディレクター

今回番組を作ったきっかけは、部長の君沢から説明があった通りで、「証言を集めた番組を作ってみないか」ということで動きました。それまではニュースのために震災後、日々の変化を取材してきましたので、震災当日に軸足を置いた教訓という観点からは、振り返ってみると十分な取材は出来ていなかったと感じていました。もちろん私も津波を撮影して自分なりの教訓を感じていました。日々の取材から、取材した皆さんが、いろんな教訓、その人なりの教訓というものを持っているなと感じておりましたので、一度立ち止まって、さまざまな人から教訓を聞く事は非常に重要であると思い、この話しを引き受けました。

取材対象の人選にあたっては、自分が宮古支局に来て二年ほど経っていて、宮古の町に愛着を感じておりましたので、宮古の人たちに取材する事が多くなりました。その他の地域についてもいろいろと取材をしたかったのですが、今回はニュースなどで話題にあがった人を中心に、もう一度自分で直接話を聞きたいと思い、取材を進めました。

番組でもうひとつ心掛けた事は、最後に希望を持たせたいという事です。今回の震災では本当に多くの方がたくさんの物を失って、心に深い傷を負ったと

思います。「辛い」「大変だ」という話しで終わらせてしまっては、当時の辛い記憶を呼び起こすだけだと思いました。実際に取材をしていても、悲しい話、辛い話はもういいという人たちの声も聞きました。そんな人たちのために人々が前に進む希望が欲しいと思いました。

実際、今回津波で大きな被害を受けてもそこから津波に負けないで立ち上がっている人たちもたくさんいました。それは取材をしていて感じました。強いなというか本当に頑張っているな、この姿は絶対に伝えなければいけないと思い、そういった方々を最後にもってきました。今日はよろしくお願いいたします。

○中村委員長

ありがとうございます。

それでは、藤原委員からお願いします。

○藤原委員

非常に見応えがあって、あっという間の１時間でした。命がけで撮った映像、最初の所ですね。井上さんを含め、あとは視聴者の方々が撮った映像。何回も見ていますが非常に迫力があって、そこからまず引き込まれました。

全体の構成で言えば、ただ大変だったという事ではなくて、最後の部分の希望ですね。宮古の漁協の方々には、本当にたくましい人が多くて、行政なんかに頼っていられない、ということで、彼らが真っ先に始めたように私も記憶しています。そのような事を丹念に伝えて、それを締めに使った。全体の構成としては非常に良かったと思います。

個々について言いますと、ブティックの男性は長く取材したからすごく良かったと思います。悩んでいた時期がありましたが、おそらくまた借金を抱えて再スタートするのでしょう。あれは丹念な取材の成果だったと思います。

いろんな人が登場していて、偏った物語ではなく、その合間に東北大学の先生のシミュレーション、田老の日本一の防潮堤のシミュレーションの映像で紹介する辺りも、津波の怖さを立体的に紹介できていたと思います。

防潮堤についてはいろいろと議論のあるところで、これからも高さや規模をどうするのかという議論はあると思います。番組の中でも強調されていたように要は逃げる事ですよね。田畑ヨシさんは「津波てんでんこ」で「てんでんに逃げろ」と言い続けました。明治の津波でお爺さんから伝えられたその事を教

訓にして、今回も生き延びた。ただ逃げるということが、田畑ヨシさんを通じての教訓として広まっていたのではないかと思います。

私が番組の中で一番感動したのは、陸前高田のけんか七夕でした。１台ですからけんかにならないのですが、祭りにかける地元の青年たちの熱い思いが伝わり、映像も綺麗だったですし、すごく良かったと思います。

ちょっと物足りなかったのは、田畑ヨシさんが作った鎮魂の歌の部分です。“サスライメイカー”が曲をつけて歌ったあの映像は、雫石でやったチャリティコンサートではなかったかと思いますが、ワンフレーズぐらい紹介してほしかった。あれはけっこう良い曲で、鎮魂の歌の詩自体も全文をテロップで流してくれれば良かったです。そこだけが私からの注文です。

とても良かったと思います。今後とも定期的にこういう番組を作って末永く取材していただきたいと思いました。

○中村委員長

八木橋委員、お願いします。

○八木橋委員

全体としては、今お話があったように見応えがあっていい番組だったと思います。こういうドキュメンタリーを作る時にはいつもそうですが、テーマ別にするとか、地域別にするとか、いろんな方針を立てるのだろうと思います。編集の問題もあるのですが、今回はこれ１本の番組ということだったので、多少、総花的になったけれども全体を網羅していました。それはこの番組１本である程度見せるという意味では、成功した番組ではなかったかと思います。

個別的に非常に感動したのは、重茂のところで組合長が行政の方針もまだろくに決まっていない時に、１ヵ月位で漁業再建の方向を宣言してまとめていく、というところでした。あれはその地域、地域のリーダーが行政に頼らないというと語弊があるけれども、組合長の存在が非常に大きいという気がしました。県も漁船を漁協でまとめて買って、それで漁民にリースするという方針を出していますが、これも予算が付かなければどうしようもない話しです。そういう県の方針が出る前にこういう方針を出して、漁業再建という方針を出して村から離れて行く人たちを何とか留めてやっていこうという意気込みがある事に感動しました。岩手県では明治の津波の時に柴琢治という唐丹村の村長がいました。この人は医者だったのですが、自宅を開放して私設の救護所を作って頑

張ってやってきた。ある程度、地域、地域でそういう人がいないと、うまく復興が回っていかないのではないかという事で、重茂の組合長の話しには非常に感動しました。

もうひとつ感動したのは、今も話しに出ましたが、鍬ケ崎の佐藤衣料店です。若い店主が悩んでいるところをそのまま素直に隠さずに撮ったというのは非常に良かった。あれで地元の人たちがどれだけ悩んでいるのか、ということがよく分かると思います。

一点、気になったのは「てんでんこ」の話しです。「てんでんこ」はいろんな解釈があって、津波になったら我かまわず逃げろという解釈もあるし、そもそも信頼関係があるから言えるのだとか、いろいろな解釈があって、人それぞれの解釈でやっているわけです。ただ昔の人たちの言い伝えをどういう風に受け取っていくのか、また学校で教育する時はどのようの教えるべきなのか、よく考える必要があると思います。家族を確認しに行って、そのために津波にのまれてしまった人も多いので、今後、防災教育にどう生かしていくのかが非常に気になります。「てんでんこ」の解釈に合わせて伝えていくのもひとつの手ではないかという気がしました。

最後に映像がもっている力は非常に大きいので、こういう番組を連続して制作するのであれば、テーマ別とか、前も言ったようにどこかに検証を入れるとか、そういうような事も入れながら、一度だけで終わらずに作っていただければと思います。

私は震災の日に東京にいて会議をやっていて、地元では電気が止まったようですけど、実際にその日の夕方テレビでニュースを見ました。先ほど見せていただいた宮古の映像が東京では夕方のニュースで流れていましたが、物凄いと思いました。石巻の火事もその日の８時ごろには流れていました。やはり映像のもつ力は非常に大きいので、テーマ別などで残しておいていただければと思います。

あの時、一番心配だったのは高田の映像をどこの局も流さないことでした。実際は流せなかったのですが、アナウンサーが「高田は壊滅的な状態になっています。まだ映像が入って来ていません」と言うんです。そっちの方に怖さを感じました。石巻が火事だと分かって赤々と燃えているのはどこかの局でやっていました、それは見えます。壊滅的で記者も入れない。宮古の映像で車が浮いて流れているのを見ているわけですが、それに比べて高田の記者も入れないようなひどい壊滅状態というのは、どれぐらいなのだろうかと創造力をかきた

てるんです。そういう意味でテレビのもつ映像の大きさは非常にあるので、今後、テーマ別とか、こういう点が問題だったとか、いろんな形で残して欲しいです。例えば防災無線、携帯衛星はどの程度、県立病院で持っていたのかとか、市町村で持っていたか、というような検証も今後は入れていった方がいいのではないでしょうか。大船渡では県立大船渡病院に１台しか携帯無線がなかったとか、役場にはなかったとか、馬鹿みたいな事を言っているので、それも今後の検証の中にいれていただければという気がしました。

○中村委員長
　斎藤委員、お願いします。

○斎藤雅博委員
　一昨日の日曜が震災からちょうど半年という事で、多くの震災特集番組が組まれていました。それらを見ていましたが、新たな映像も含まれていて何度見ても自然の驚異、津波のエネルギーの大きさに驚きを覚えたしだいです。同時に単なる記録という事ではなくて、震災から学ぶ、教訓にするという姿勢が感じられるものが多かったように思います。
　この番組も井上記者が被災者を丁寧に取材、当時の状況をつぶさに検証しており、何が起きて、被災者それぞれがどういう行動を取って、その結果どうだったかということがよく分かって、この震災を風化させないという強いメッセージが感じられる良い番組だったと思います。
　紙芝居で「命てんでんこ」を語り継いでいる田畑さんが「時が過ぎれば忘れられるし、記憶も薄れる。だからこそ言い伝えの大切さ、語り継ぐ大切さがある」と言っておりましたけども、テレビも全く同じだと思います。津波の恐ろしさや教訓を後世に伝えて行くという使命があると思います。
　教訓という意味で、釜石東中学校の校長先生が防災教育をきちんとやってきたという事を仰っていました。おそらく宮城県に比べて岩手県の子供の犠牲者が少なかったのは、そういった過去の教訓がきちんと生かされたという事ではないかと思います。宮城県の子供たちの悲惨さを我々もテレビ等で見て感じていますが、今回、釜石東中学校はよくやったと思います。
　面白かったのは、前のお二人も話していた重茂漁協の伊藤組合長さんが、ある種、危機時のリーダーのあり方を見せてくれたような気がします。やはり一早い決断が実際に復興を早めているし、若い人たちがひとりも地区を出ていな

いという事を仰っていましたが、そういった事に繋がっています。ここは行政とか政治家に本当に伝えたい事だと思っています。

構成で番組後半は前を向いて歩き始めた人たちにスポットを当てていて、前半に比べて明るい気持ちで見る事ができて非常に良かったと思いました。やはり鍬ケ崎の佐藤夫妻の開店日のご夫妻の表情を見て、本当に良かったという気持ちになりました。高田の船長の平野さんは、祭りが繋ぐ地域の絆と仰っていましてけど、全くその通りで前向きに生きている人たちを映像化するという事で、視聴者にそういう思いが伝わったと思います。

吉村昭という人が三陸海岸大津波という本を書いておりまして、過去３回の大津波の事を書いています。その中で「津波直後は高台に住む傾向があるが、記憶が薄れて行くと結局浜に近い所に住み始めて、その繰り返しが見られる。」そんな記述がありました。そういう意味でも、私達は今回の教訓を後世に伝える義務があるのではないかと思います。このような番組を定期的に制作、放映し語り継ぐことが大切であると思いますので、ぜひ続けていっていただきたいと思います。

〇中村委員長

村上委員、お願いします。

〇村上委員

本当に井上さんお疲れさまでした。番組の冒頭で「浜の声を聞く毎日が始まった」という一言で始まったのがすごく印象的でした。これから始まる番組のメッセージとか、思いを伝えるという意味で、そこで準備ができたと思います。

この番組で一番強いことは、井上さんが実際に津波を経験した当事者だったという事だと思います。そこで自分の思いとか感想とか、いろんな感情がありながら、それをベースに、冷静に実際に経験した事が感じられる、いろいろな目線が番組の最後まで貫かれていたと思います。

まず人選で苦労されたと思います。番組では１０何人かに絞られていましたが、その何倍もの方のお話を聞いていたと思います。その中で最初のこの番組に込めたいもの、教訓なり風化させないためのテーマから本当に外れないで証言を引き出して、それをまとめたという筋が最後まで通っていると思いました。たぶんお話をして、井上さんも思い出して共感したり恐怖が蘇ったりしたのではないかと思います。証言を集めた方々も年配の人から若い人までいろんな年

齢の方といろいろな経験の方々で、宮古が中心になっていると言っていましたが、人選が本当に良かったと思います。

年配の紙芝居のおばあさんとか、実際に聞いた話を伝えてくれる方とか、若い衣料品店のご夫妻やけんか七夕のリーダーとか、とても前向きな人たちの話とか、先人の知恵を学ぶというような、いろいろな角度からの証言や、教訓を非常に分かりやすく、しかもしっかりストレートに伝えてくれる内容だったと思います。

映像は何度見ても怖いですし、どんな思いで当時いたのか、当日の証言に軸足を置くということは良かったと思います。釜石の小学生、中学生が「普段からやっているから避難が出来たんだよ」というあのコメントも、子供、小学生だからこその正直なストレートな証言でした。大人が聞いてハッとしたと思います。あとは先生が「率先避難者たれ」という教訓を仰っていましたが、こういう言葉が防災教育のスローガンだったり、それが真髄なのかと思いました。沿岸の特に釜石、鵜住居ではこういう教育があるのだと初めて知り、本当に驚きました。

記録でありドキュメンタリーで、ＢＧＭもない証言と映像だけという非常に真っ正直なドキュメンタリーだったと思います。それだけに真っ直ぐ伝わってくるものがありました。

○中村委員長

東海林委員、お願いします。

○東海林委員

私もこの番組を拝見して井上さんが本当に自らの足と時間をかけて、いろんな物を集めてくださった事が番組からヒシヒシを感じてきて、非常に感動して1時間の番組を見ました。ただ、このＤＶＤを見たのが日曜日の11日のお昼だったのですが、夜にＮＨＫでも実はそういう番組をやっていて、重茂の漁業組合長さんですとか、田老の小林さんが、命がけでカメラを回していらっしゃった方なんですけど、同じ方が同じような映像で、同じようなインタビューに答えていました。しょうがないと思いますが、同じ方にどうしても取材は行ってしまうのだなと思いながら、ＮＨＫの番組を見ていました。ＮＨＫの場合はやっぱりそれなりの人ですとか、お金だとかいろんなものがあって、田老の小林さん、それから重茂の漁業組合長さんに対しての取材に関しては、はっきり申

し上げてＮＨＫの方がかなり深く聞き込んだ形で、時間もかけて取材していると感じました。

ＮＨＫのドキュメンタリーの作り方と民放の局でなければ作れないドキュメンタリーというのがあるのだろうと思いました。そこの部分に関しては、先ほど委員の方もおっしゃっていましてけど、こういう番組で漁業関係者の方のインタビューが比較的多い中で、これは井上さんでなければ取材できなかったのではと思ったのが、宮古の商業地の鍬ケ崎の佐藤衣料店さんへのインタビューです。ご夫婦がこんな風に頑張っていらっしゃっているという部分がすごく光っていたと思いました。

民放のドキュメンタリーというと、金沢の能登にある田舎の商店を取り上げて準グランプリを取った番組があったのを思い出しました。それは民放ならではのドキュメンタリーで、4 年間の長きに渡ってひとつのゼネラルストア、万屋（よろずや）さんを取材していて、主要人物がその間に残念ながら亡くなったりするのです。特別な何かがあるわけではないんですけど、脈々と 4 年間に渡って番組を作り、それが見る人に感動を与えるというような番組でした。短時間でガアッと作るのは他の局にも出来るかもしれませんけれど、ここは、めんこいテレビさんとしては、ずっとこれから例えば 4 年間、5 年間を通して、少しずつ一人の方、あるいはそういう所を地道に取材していけば、民放の局のドキュメンタリーとして、きっと後から見直したときに「ああいい番組だったなあ」と思えるようになっていくのではないかと思いました。

ここで半年経って終りではなく、この後の復興を私たち自身もずっと内陸にいて見守りたいと思っていますし、そういう番組が出来たらいいなと思いました。

〇中村委員長

久慈委員お願いします。

〇久慈委員

お疲れさまでした。久しぶりに津波の映像を見て「ああ、そうだった」と思い出すというか、いろんな意味でいろんなものを思い出したというのがひとつです。改めて見るとすごい映像だと今回感じました。

アーカイブで残すという形でお話されていたので、それはもちろん当然の事であって、これをどうやって次の世代に引き渡して行くかという事を、めんこ

いテレビとしてはしっかり番組にしていく事が大事だと私も思っています。
　今回、津波に焦点を当てて特集したのはとても良かったと思います。原発、原発ばかり言われているので。原発問題は、我々も今、米、稲の問題で大変ですけれども、それよりも岩手を襲った津波に関しては岩手として、宮城、福島もやれるかもしれませんが、きっちりと検証していくことが大事です。こうして良かったということで、ちゃんと避難の訓練をしていた所をもっと報道していく事で、学校も本気になっていくのではと思っています。
　演出とか全くなく音楽もなく、あれで良かったと思います。言葉といろんな方の証言だけでやったのが良かったと思います。願わくはテーマを変えていろんな視点で、またいろんな所を特集していただければと思っています。
　我々の業界も東北の酒造組合加盟の蔵が全部この間集まりました。ひとつもやめる所がないです。特に福島、原発で大変な状況になり蔵元も避難しています。私の友人も浪江町の海の目の前で酒蔵をやっていましたが、全然帰れないため、山形で酒を作るという話しになっています。そこまでして酒を造るんですよ。漁協の組合長さんが早々に復興の方針を打ち出して頑張れたから、あそこから若者が一人も逃げて行かなったというのと一緒で、我々東北の酒造関係者も一軒もやめることなく、何百年も続いてきている酒造りを後世に伝える事こそ復興の礎になるとしてやっています。ぜひ、沿岸の被災した３蔵プラス何とか助かった浜千鳥さんを取材していただいて、いろんなテーマで何回も番組を作って下さい。忘れた頃にまた思い出せるようにやっていただいて、僕らの次の世代まで、きちっと岩手の放送局として伝えて行く事が責務だと思います。
　ぜひ、いろんな角度から取り上げて、番組を作って下さい。僕の子供はまだ９歳ですので、あまり見せられないですけど、彼が大きくなったら僕は必ず見せようと思っています。あとできちっと子供たちにも見せられる貴重な番組だと思いますので、これからも頑張っていろいろと作ってください。

○中村委員長
　吉田委員、お願いします。

○吉田委員
　何度見ても、あの迫力ある映像については本当に驚かされました。改めて感じた事は、津波の恐ろしさでした。破壊力があんなにもすごいのかと、本当に怖いものだと思いました。おそらくテレビを見た沢山の方々がそのように感じ

取ったと思います。

全体の構成の流れの中で、私なりに感じた事をお話しますと、井上アナウンサーが出だしの所で「浜の声を聞く毎日が始まった」という事で次から次へと証言が出てきました。最後の方では確かに希望を与えるという意味であのような番組の構成になったと思いますが、井上アナウンサーが聞き出した証言の中から見えてきたものは何だったのかという素直な感想や、何が一番被害を大きくしたのかなどということを含めて、まとめのようなものがあれば、番組としては引き締まったのではないか、という感じがします。

もうひとつは何人かの方の証言の中で、お年寄りの方の話しがありました。まさに地方方言のそのもので出ていました。おそらく岩手以外の方が言葉を聞きますと「あれ、何だろう」と聞き取れなかった部分があったと思います。私たちは「たなけ、たなけ」と言われてもすぐわかります。「持ち上げろ」ということです。でも、普通の人は「たなけ」と言っても分かりません。そういう意味ではテレビで字幕のような解説が必要だと思います。そういうような事を感じました。

それから欲を言ってはきりがないですが、こういった津波は何十年も経ちますと皆風化されていきます。先ほど八木橋委員も仰っていましたが、明治の三陸津波の頃のさまざまな出来事もけっこうあります。ほとんど忘れているんですけど、出来るだけ、ああいうものをクローズアップして、今回の津波との比較をしてくれると、ますます分かりやすかったかなという感じがしました。

今回の番組をずっと見ていて、いかに津波が怖いのかという事をみんなに知らしめるということが狙いとしてあったと思います。実は数日前に自衛隊の協力隊の組織の総会がありました。その中で救助にあたられた自衛隊の方の生々しいお話もありました。画像を映しながらお話を聞いておりましたが、本当にその中でもびっくりしたのは、せっかく生き残れたのに殆どの方が第一波が来た時に貴重品を取りに皆がもう一度戻っていたという事です。「津波がまた必ず来るぞ」という事がわからない。体で覚えていないという事です。戻った方々の殆どが渋滞にあって全て波にのまれた。そんなお話をされていました。とにかく車から出すのが大変だった。ご遺体をできるだけ傷つけないように、車のボンネットの方から出していく作業だったという話しを聞きました。そういう意味では、まだまだ証言以外に伝えておきたい事、知られていないこと、知らしめておきたい事などが沢山あると思いました。これからの番組の中にもそういうものを拾い上げていただければと思います。

いずれにしましても、ドキュメンタリーとして非常にシンプルにまとめられ、無駄のない構成で素晴しい番組だと感じました。

○中村委員長
三浦副委員長、お願いします。

○三浦副委員長
私も大変素晴しい番組だったと思っています。井上さんの冒頭からの冷静な対応に好感をもって大変いいなと思って見ておりました。言葉の重み、経験の重みという事で、教訓は冒頭の番組の制作のテーマでしたが、後世に伝えるべき貴重な教訓を分かり易く伝える映像が効果的でありました。
全国的にも有名になっている「命てんでんこ」とか「ここより下に家を建てるな」「率先避難者たれ」という言葉が出ていました。こういった言葉が後世に十分伝わっていけるような効果的な作り方をしていると思いました。
もうひとつ「絆」「リーダーシップ」という人としての優しさや力強さという事も、大きなテーマとして取り上げられていたようで、これも非常に感動的に思いました。いろんな雑誌、新聞でも取り上げられて釜石の奇跡とも言われていますが、あの画面でも中学生の女の子が、小学校の低学年なのでしょうか、子供たちの手を引いて避難するという、あのシーンがいいなあと思いました。子ども達の連帯感、責任感と言ったらいいのか、非常にいい場面であったと思っています。
私もサラリーマンですけど、”かもめの玉子”の専務さんが出ていましたが、「早く逃げろ」という指示は非常に貴重なものだと思っています。この経営側の従業員に対する安全対策、安全配慮というのは非常に大きなテーマです。瞬時にそういう指示が出るのはいい事だと思いました。大事な書類を持って逃げろとか、お金を持って逃げろだという話しでは困ります。とにかく早く逃げろというのは見ていて一番大事な事だと思っています。結果的にそれが会社に対するロイヤリティにもなっていくわけです。失った物は取り返せるわけですけど、取り返せないものがあるという事で、専務さんの判断や非常に印象に残る言葉は良かったと思いました。
あとは重茂漁協の組合長さんの話しも大変有名になっています。知っている人もいます。重茂漁協は大変力のある漁協さんなので、ああいう事も率先してできるわけですけれども、県内の各漁協さんは小さい所もありますので、やり

たくてもできない漁協があるという中で、重茂漁協さんにはプレッシャー、自分たちだけが勝手な行動をというようなプレッシャーもかかっている事も聞いています。そういう中でも非常時ですので、あのように出来る所はとにかくやっていくのは非常に大事な決断です。それもなかなか辛いところもあるようですけど。リーダーシップの大事さというものが、よく伝わってきたと思います。「教訓」「人とのつながり」「リーダーシップ」というテーマが効果的に画面を通じて伝わってきています。今回の番組自体が貴重な価値をもっています。ぜひ、長く保存して継承していければと思っています。

私事ではありますけれども、会社も今回の復旧を通じていろんなことを経験しております。最初からガソリン不足とか、いろんなことを経験しております。社員、工事関係者、いろんな証言を今集めてまとめました。フリーで電力側は電力側としての記録を保存しておきたい。教訓を次の世代にも伝えておきたいという思いでまとめています。非常に貴重なものもあります。お互いそれぞれの立場で、教訓は継承していくべき責任があると思っています。

○中村委員長

この番組は番宣もだいぶしていました。津波の事は先ほどからいろいろ話しがありますけれども、我が家なりの後世に伝えたいということで、ハードディスクに気がついたものは録画しました。これもぜひ録っておかなければならないと思っていました。最初に見せていただいた番組や、ここでいろいろと取り上げていただいたものもありますが、私が見た限りではこれが一番良かったという感じの大変素晴しい番組でした。

前半は津波体験から来る教訓的なところを３分の２位やって、後半はこれからの復興に立ち向かおうとする人たちを取り上げていただいている。先ほど、項目の整理という話しもありましたが、それなりの整理はされていると思いながら、全体的に見させていただきました。特に淡々といろんな方の体験を繋ぎ合わせていっている中に大変、私にとっても教訓的な、なるほどなあというお話しがありました。

ひとつは「命てんでんこ」です。これが有名な言葉になっているという事は先ほどからお話にありますけれども、これを田畑ヨシさんのお話の後に、釜石の話しにつないでいました。釜石東中学校の平野校長先生が「てんでんこ」というのはただバラバラに逃げればいいのではない、助けられる人は助ける。人を助けるということを含めて逃げていく。まず「率先非難者たれ、その中で助

けられる時は助けて、逃げて行く事が大事なんだ。」という意味合いでお話されていて、いいつながりで聞かせてもらいました。それが結果的に鵜住居地区の小学生、釜石東もそうですが、石巻の大川小学校のような悲劇にならずに、全員が助かったという事に繋がっているという事で、大変いい教訓でした。これは、きちっと後世に伝えて行くべき話しだと思います。

同時に”かもめの玉子” の斉藤専務さんの日頃からの思いや、避難路をきちっと提示し、絵に描いて示して、地震が来たらすぐ逃げるという話しがありました。ある意味では職場のリーダーシップが発揮されているという事で、とにかく逃げることが堤防よりも何よりも大事だという事を、今回この番組を通じて感じさせてもらいました。ただその時に大事なものを取りに帰るとか、それから津波が来たのがわからない人がいます。堤防の向こう側で見えなかったという話しもありました。音が聞こえなかったという話しもありました。別な番組だと思いますが、旅館の女将さんが一旦避難したのに降りて行って、従業員を引っ張り上げないと来ない、何かのんびりしているような状況でわからない、仕事に一生懸命になっていた人もいたとか、ということもありました。

この番組の中で特に印象深かったのは、撤収命令が伝わらなかった宮古の消防署の阿部主悦さんでした。たぶん防災無線で撤収しろよ、とあったのだろうけれども自分には分からなかった。たまたま撤収しろよと伝えるものを周りで持っていなかったし、人がいなかったのだと思います。この件と田老のよく出てくる小林さん、この方は警報が聞こえなかった。停電で聞こえなかったんではないかというお話をされていました。これは私は事実関係はわかりませんけど、もしそうだとしたら大変重要な問題だと思います。とにかく津波が来たら逃げろという事を早く伝えなければいけない。感づいてすぐ逃げたという斎藤専務さんのような方がいればいいですけど、そうでなければ仕事に夢中になっている人とか、何か物を取りに帰らなくてはいけないと思っている人に対しても、とにかく逃げろという事をどうやって教えるか。避難をさせるための手段をどうするか。停電になったとしても伝えるために、これからどうしなくてはいけないか。私は一技術者の立場ですが、非常に大きなテーマを与えていただいているのではないかと思いました。無線とかいろんな方法で、あるいは停電になる前にどう伝えていくか。あるいは停電になってもどうやって伝えて行くかという事はいろいろ考えていかなくてはなりません。とにかく逃げていただく手段を考える必要がある事を提示していただいたという意味では、非常にいい教訓だったと思っています。

何と言っても、これから立ち向かって行こうという話し、要するに地元にきちっと腰を据えてやっていこうという話しは、この番組でも他の番組でもそうですが、これを見ると私は年のせいかいつも涙が出てきます。重茂漁協につきましては、ここは昔から大変組合長さんが偉いのか、組合員が偉いのか分かりませんが、大変先進的な漁協として成功して、若い人も残って年収もかなりいいという話しは以前から聞いていました。今回の津波の後の対応を見て、特にこの番組を見せていただいてなるほどなあと思いました。こういう一早い決断をして、組合員を引っ張っていく人がいると、伊藤組合長さんだけではないと思いますが、そういう方々がいる所はやはり強いと思いました。同じ意味で鍬ケ崎の佐藤さんは古里が好きである、鍬ケ崎が好きである、宮古が好きであるという事で、そこでいろいろ悩みながらも店をまた再開をしていく。陸前高田の平野さんは、900 年も続いている祭りを消したくないと。これを盛んにすることは亡くなった人への供養でもあるし、復興への大きな力になるとい事で一生懸命始めている。こういう事は他にもたくさんあると思います。こういう事をひとつひとつ取り上げていただきたい。

私のように大学にいる人間としては、こういう前向きな人間をどうやって育てていくかというのが非常に大きな役割で、リーダーをどうやって作っていくかが大きな役割だという事を痛感させていただきました。

大変素晴しい番組を作っていただきましたので、みなさんも是非、こういう番組を今後も継続して作っていただきたいと思いました。

最後にひとつ。先ほども藤原委員からお話がありましたが、最後の鎮魂の歌は、私もきちっと全曲聴いていない。井上さんもコメントを言っておられたけど、最後の締め、エンデイングが何となく尻切れトンボになりました。せっかくいい話しが続いて「よしと、なかなかいい番組でこれからだ」、立ち向かう人たちもいろいろ描いてくれて、そこにこの歌ですから僕は期待して、この歌をバックにしながら、もっと盛り上げてくれるような、非常に印象深いコメントを言ってくれて「ああ良かったなあ」となる事を期待していましたが、最後これがなかった。この辺、番組作り上、私の趣味としてはもっと盛り上げてほしかったということを、一視聴者として注文させていただいて、私からのお話は以上にさせていただきます。

○中村委員長

他にご意見のある委員はいらっしゃいませんか？

○八木橋委員

できればですが、今の番組は単発番組として見せるには十分だと思いますが、もしシリーズものを作るのであれば先ほども言いましたが検証もやっていただきたい。防潮堤は田老の 10 メートルでは駄目で、普代の 15 メートルでは助かったと、一方でハードよりもソフトだ、というのはその通りです。1000 年に 1 回で 15 メートルで助かるならば、もし全部 15 メートルにしたらいくらお金がかかるのか、そうした検証をきちんとやるとか。医療無線、防災無線は非常に高い、昔は 300 万円ほどしていました。今はいくらか知りませんが、そういう事で各自治体に付けるには金がかかり過ぎるのか。各病院に付けるには金がかかり過ぎるのか。その辺も検討するとか。被害を最小限度に抑えるために何が足りなかったのか。停電になった時に動く電気はあるのかとか。もし、そういうのがあるのならば予算的に防災で呼びかける時に。地震の時は必ず停電がきますよね。その時にどういうマイクを町内のどこ辺に設置すれば万遍なく聞こえるのかとか。例えば宮古市の場合は 1 億かかるとか、久慈なら 5000 万円でいいとか。そういう検証をしていかないとソフトで逃げると言ってもうまく今後に役立たない。そういう検証をやる必要がある。

もう少し突っ込むと、ガレキの処理が進まないというのがあります。あれは金属だの木材だの、手で選別しているんですよね。産業廃棄物は平和時というと語弊がありますが、戦争や天災のない時に使う法律です。非常時の時に県知事や市町村長の判断で適宜処理ができるという、簡単に言うと日本の法律には非常時の法律が抜けています。そういったものがないために平和時と同じ分別をして捨てろというわけです。あのガレキを普通の手続きでやっていたのでは、いつまで経っても進まない。神戸の時に自衛隊嫌いの知事がいたので、自衛隊に要請しないために救出が 3 日遅れたという馬鹿な話しがあったのですが、そうした不幸な時代もありました。今の時代だったら非常時災害法で、例えばガレキの分別を盛り込むことも考えられます。宮城県知事が物議を醸しているのは建築制限、何の根拠でどれ位待たせるのかというのがはっきりしていない。そうしたところを検証していく事が必要です。特に宮城県知事は勇気があって、漁業に民間会社を入れろと言っているが、本当の意味で復興になるのかならないのか、いろんな検証番組がこれから必要なのではないかという気がしています。

ＮＨＫのように正面から大上段に構えなくてもいいのですが、なぜ遅れたの

か、なぜこうだったのかを知るという意味で、折に触れ、被災者の生の声を直接取材して検証していくことが、地元のテレビ局に必要ではないかと思います。

○中村委員長
　それでは、欠席委員からのレポートがありましたらお願いします。

○事務局
　斎藤委員のレポートです。

　取材した井上さん自身が被災者であることから、力のこもった内容となっていると思いました。
　いずれ、人々の記憶も風化してしまうかもしれません。そんなとき、この番組がまた必要になるはずです。
　ただ、鍬が崎の佐藤衣料店はもう少し短く編集してもよかったと思います。
　神戸の「人と防災未来センター」には、職員のほかに、ボランティアスタッフが案内係として常駐しています。そのボランティアスタッフは阪神淡路大震災の被災者の方々です。
　彼らは阪神淡路大震災の「語り部」と呼ばれています。
　東日本大震災の語り部も必要とされるでしょう。私がセンター長をつとめている復興支援センターでも、神戸から防災を研究されている方たちが視察にいらした際に、盛岡に避難している方にお願いして、試験的に「語り部」を実施しました。
　このとき、テレビは一度にたくさんの人に情報を伝えることができますが、生身の人間が伝えることも大切だと痛感しました。
　今後も、津波の被害を伝え、残すとともに、復興のようすもきめ細かく取材していただければと思います。それと、神戸の「人と防災未来センター」を取材して、岩手のみなさんに広めてください。いずれ同様の施設が岩手でもつくられることになるでしょう。

○中村委員長
　では次に、新たに始まった番組種別の公表制度に関わる審議をこれから行いたいと思います。皆様のお手元に「放送番組の種別の基準（案）」という資料があると思いますが、これについてめんこいテレビの前田編成技術局長から説明をお願いします。

○前田取締役編成技術局長

前回のこの会議で予告させていただきましたが、放送法の改正により放送番組の種別を広く一般に公表する、それにあたり種別の基準をそれぞれの社で策定することになりました。作りました案がこの資料です。私どもと同じように、公表制度を導入する社は民間放送事業者だけでも１２７社あります。それぞれの社が全くバラバラでは困るということもありまして、民放連で一定の指針、基準例を作っており、めんこいテレビとしても、その例を基本的に踏襲する形で基準案として策定しました。これにつきまして、本日の審議会に諮問させていただき、答申を頂戴したくご審議をお願いします。この件につきましてご意見・ご質問がございましたらお願い致します。

○中村委員長
基準案の「報道」「教育」「教養」「娯楽」「その他」で、「通信販売」と「その他」ということで、この種別の基準のところに書いてあります。これがいいかどうかという事ですね。ご意見ございますか？　教育と教養をどう分けるかというのもけっこう難しいのかもしれませんね。

○前田取締役編成技術局長
そういった部分は、番組を制作する人の意思で決まるものだと考えます。ひとつの番組の中、例えば情報番組の中に、ニュースのコーナーがあったり、通販のコーナーがあったりしますので､60 分番組の中の 10 分間を例えば｢報道｣、30 分間は「教養｣、後の 20 分間は「通販」などに、そういった区分けをすることになります。

○中村委員長
公表はどのような形でやられるのですか？

○前田取締役編成技術局長
これから先の作業になりますが、参考としてもう 1 枚の資料をご覧下さい。本日この諮問をさせていただいているのが①になります。本日、「これでよろしい」という事になりましたら、これからの作業に進む事になります。基本的には 6 ヶ月ごとに公表します。公表の仕方については、特に規定はございませんので、めんこいテレビではホームページで、表のような形にして公表することを考えています。合わせて 4 月と 10 月の番組審議会で同じものを報告させ

ていたく予定にしています。

○中村委員長
　個々の番組についてあまり議論はできないんですよね。全体してどういう割合になっているかということですね。たまたま番組を見ていて「これはおかしいのでは」という事であれば出してもらってもけっこうかもしれませんが、いかがでしょうか。まずは基準案でよろしいでしょうか。

○斎藤委員
　生活の向上とありますが、例えば娯楽の中の「生活」というと短いような気がします。「人生」という所に入らないのかと考えました。人生を豊かにすると言った方が広がりがあるような気がします。生活というとすごく短期的な感じがしました。

○前田取締役編成技術局長
　めんこいテレビだけが特別な基準で集計しまうと、公表された時の基準が狂う事になりますので、慎重に検討させていただきたいと思います。

○中村委員長
　そういったご意見もあったという事でご検討をしていただくという事にしていただきたい。どのようになったのかは後でご報告いただけると思います。原則としてこの基準でよろしいということでいいでしょうか。（異議なしの声）それではそういう事でお願いしたいと思います。

○中村委員長
　他に何かございますか？
　無いようなので、以上で本日の議事はこれで終了とさせていただきます。
　ありがとうございました。

○事　務　局
　中村委員長、ありがとうございました。
　今回の審議会の模様は９月２４日（土）朝４時４２分から「めんこいテレビ番組リポート」として放送いたします。
　次回は１０月１１日の正午より、こちらのホテルでの開催となります。

それではこれで番組審議会を閉会させていただきます

７．審議機関の答申又は改善意見に対してとった措置
特になし

８．審議機関の答申意見概要を公表した場合におけるその公表内容、方法及び年月日

平成２３年９月１４日（水）　産経新聞　東北版

▼岩手めんこいテレビ番審　岩手めんこいテレビの第205回番組審議会（中村慶久委員長）が13日開かれ、１時間のドキュメンタリー番組「浜からの証言―2011・３・11　東日本大震災」を審議した。

委員からは「大津波の迫力に圧倒された」「後半は希望を与える内容でよかった」「再建に向けた宮古市の衣料店を取り上げたのは独自の視点だった」などと評価する声が相次いだ。

平成２３年９月２４日（土）午前４時４２分から４時４５分まで「めんこいテレビ番組リポート」内で放送

据え置きの書類を作成し、本社受付に置き一般の人々が自由に閲覧できるようにした

９．その他の参考事項
特になし